

## 気象学長期計画第2次草案について

### 長期計画委員会

日本学術会議では1954年に長期研究計画調査委員会が発足し、わが国の科学の発展のための研究計画をどのようにして樹立すべきかについて検討を続けている。同委員会は1957年1月12日付で、内閣総理大臣あて、主として次の四つの点について勧告をした。すなわち、1) 研究施設、研究要員、研究費の一般水準の向上、2) 共同研究センターの確立、3) 奨励研究制度の実施、4) 学界的自主性において長期計画を検討するため、日本学術会議の研究連絡委員会の強化である。

この線に沿って各学会は、独自に長期計画を検討し始めた。日本気象学会では1963年8月学術委員会の名において気象学に関する長期計画についてのアンケートを全学会員に対して実施した(天気1963年8月号)。1964年3月には学術委員会を発展解消して長期計画委員会を設けた。委員会はそのアンケートの結果(天気1964年7月号)を参照しつつ、気象学長期計画第1次草案を1963年8月10日に作成した。

この第1草案に対しては、各理事、学会支部長、評議員、研究グループなどの意見を求めた。委員会ではこれらの意見を参考にしつつ討議を重ね、第1次草案をかなり訂正して第2次草案を作成した。現在の委員会の委員は、(順不同)吉武素二、有住直介、清水逸郎、増田善信、今井一郎、関原 強、片山 昭、松本誠一、丸山晴久、小倉義光、正野重方、都田菊郎、磯野謙治、駒林 誠、山元竜三郎、山本義一、孫野長治、吉野正敏の18名である。

第2次草案は、次のような構成で書かれている。

まえがき

1. 気象学の発展
  - 1.1 気象学の性格
  - 1.2 現段階の気象学と将来への発展
  - 1.3 3日本における研究体制の現状とその問題点
2. 研究・調査機関の拡充および新設

- 2.1 基礎研究のための機関の新設
- 2.2 行政官庁の研究・調査部門の拡充強化
- 2.3 共同利用施設および設備
3. 研究者・技術者の増強養成
  - 3.1 大学の講座および教育体制の拡充
  - 3.2 気象学従事者間の人的交流の促進

さて、長期計画委員会では、この第2次事業について以下のようなお願いを会員各位にしたいと思ひます。

第2次草案は、来る11月の福岡秋季大会で配布し、19日の討論会で会員各位から意見をだしていただく予定であります。また、当日出席されなかった会員のためには各管区気象台・研究所・大学・研究グループ、を通じて配布したいと思っております。全会員に配布すべきではありませんが、郵送料節約のため、全会員にこの第2次草案は配布致しませんので、もし上記の機関以外に所属の会員で、この第2次草案について関心をお持ちの方は、直接学会事務室に申し込んでください。お送り申し上げます。第2次草案に対する御意見は、

1965年1月10日までに、

東京都文京区大塚 東京教育大学理学部 吉野正敏  
あてに、文書でお送りくださるようお願い申し上げます。

委員会の今後の予定は次の通りです。1月10日までに第2次草案についての意見を集め、それを検討し、参考にして第3次草案を作成する。それを2月もしくは3月の理事会に提出する。

先に述べたように、日本気象学会の長期計画作成に関する活動は他の学会よりかなり遅れて出発しました。ですから、結論をだすことを急ぐ必要があります。できるなら1965年春季総会で可決したいわけです。以上、長期計画について、学会員各位の深い関心と活潑な御意見をお願いする次第です。

1964年10月26日 長期計画委員会

### 気象観測法の主な改正事項

地上気象観測法の改正にともなう主な事項についての解説が要望されているので、今回から改正のつど必要と思われることを解説と共に本誌に掲載することとした。

(1) 上層雲、中層雲、下層雲の名称の廢止  
実施の期日……1962年1月1日

理由……WMOのInternational Cloud Atlas 1956年版により改正された。それは、雲のあらわれる高さは雲

の厚さを考えると二つ以上の層にあらわれるという難点があり、特に高層雲、乱層雲などは頂の高さの範囲がわからなかったが、航空機による観測資料が多くなってくると、これらの雲は三層のいずれにも所属できないことが確かめられてきた。そこでこの改正では雲のできる対流圏を階層 (stage) でわけ巻雲、巻積雲、巻層雲は上層に、高積雲は中層に、層雲、層積雲は下層によくあらわれるとし、a) 高層雲は通常中層にあらわれるが上層にもおよぶ、b) 乱層雲は通常中層とあらわれるが上層、下層におよぶ、c) 積雲 積乱雲は底は通常下層にあらわれるが、中層、上層までのびるという remarks がつけ加えられている。以上の理由により1962年1月1日から気象庁の地上気象観測法には上層雲 (High Clouds)、中層雲 (Middle Clouds)、下層雲 (Low Clouds) の名称を廃止し次の表が採用された。

雲のよくあらわれる高さ

巻雲 (Cirrus)	上層 High étage	極地方 3~8km 温帯地方 5~13km 熱帯地方 6~18km
巻積雲 (Cirrocumulus)		
巻層雲 (Cirrostratus)		
高積雲 (Alto cumulus)	中層 Middle étage	極地方 2~4km 温帯地方 2~7km 熱帯地方 2~8km

(2) 巻雲、巻層雲、巻積雲の書き方の変更

高層雲 (Altostratus)	普通中層に見られるが、上層までひろがっていることが多い。
乱層雲 (Nimbostratus)	普通中層に見られるが、上層および下層にひろがっていることが多い。
層積雲 (Stratocumulus)	下層 Low étage <ul style="list-style-type: none"> <li>極地方 地面付近~2km</li> <li>温帯地方 地面付近~2km</li> <li>熱帯地方 地面付近~2km</li> </ul>
層雲 (Stratus)	
積雲 (Cumulus)	雲底は普通下層にあるが、雲頂は中、上層まで達していることがある。
積乱雲 (Cumulonimbus)	

巻雲の読みを「かんうん」とすることに気象学会で一応決定したことについては天気 Vol. 9, No. 1, p. 26 に掲載された。

その後いくつかの提案があった (たとえば、天気 Vol. 10, No. 11. p. 29 および Vol. 11. No. 3. p. 80) その後、「かんうん」と読むことについて多数の人の反対があり、気象庁測候課では、なじみ深い発音を残すこととして、けん雲とするなどの意見を加味し、巻雲が絹のような光沢をもつ特徴をとり入れ、また「けん雲」では他の雲形名称とのバランスがとれないので絹雲を採用することとした。

1965年1月から、巻雲、巻積雲、巻層雲は絹雲、絹層雲、絹積雲と云うことに気象庁は統一する予定である。

(気象庁測候課)

(355頁より続く)

幹事交代について

永年幹事として事務局をあらかじめ頂いた一色光雄前幹事は都合により5月末日をもって幹事を辞任することになり、6月1日より浜本丈夫幹事が就任した。浜本幹事は主として法務関係の仕事を担当することにし、主として会計関係の仕事を補佐するために同日付けで中村順子氏が幹事補佐に就任した。

尚これにともなって気象学会の関西支部事務局は大阪管区気象台調査課から予報課に移った。

×	×	×	
×	×	×	×
×	×	×	

関西気象協会研究助成運営委員

関西気象協会からの要請により当学会支部から次の4名を代表として委員に推せんした。

- 橋本清美、中島暢太郎
- 山元竜三郎、中野道雄

なお、大阪管区気象台から推せんされた野口篤美、萩谷長男、山本主夫、三沢基一の各委員および協会代表の内田泰、平林道夫、牧守真の各委員とあわせて合計11名の委員が任期4年で委員会を構成することになった。なおこの委員会は個人申請者からの申請題目を審査するだけでなく、積極的に助成すべき研究題目の開発にもとりくむことになっている。